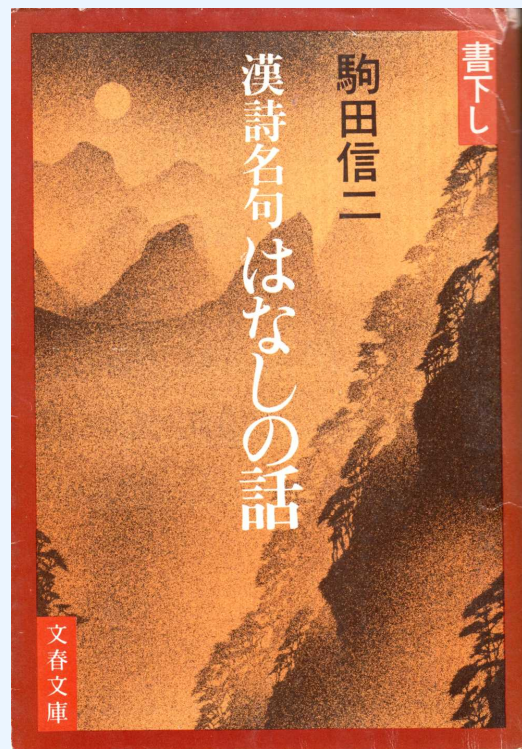
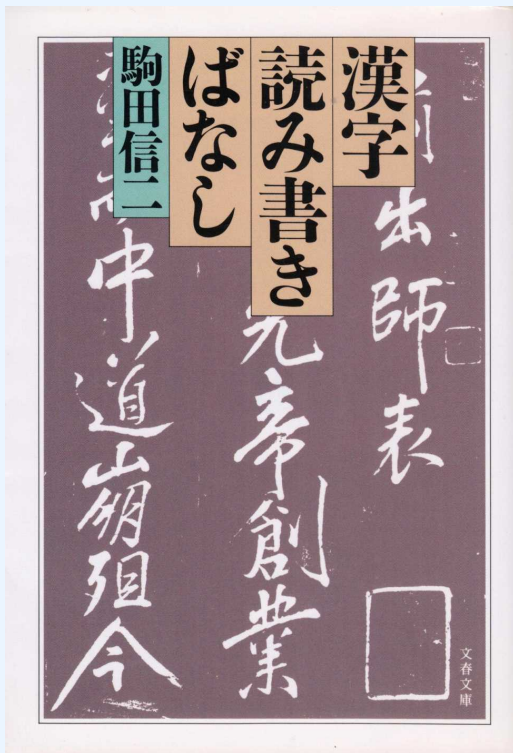


名誉顧問のコモンセンス

文章とその真意 ― 2

知りぬ 多少ぞ



逸話の真意 今回は中国文学の学者の駒田信二先生の本をご紹介します。『漢字読み書きはなし』と『漢詩名句はなしの話』の二冊です。この両著とも、漢文や漢詩についての詳しい解説書なのですが、特に凄いのは、巷(ちまた)に横行する間違いだらけの言葉や解釈に対して、駒田先生は容赦なくそれを指摘して正(ただ)しているところです。まさに快刀・乱麻(かいとうらんま)を切る如く、颯爽(さっそう)として格好いいです。

A 兄弟牆鬩

意見 兄弟を「きょうだい」と読まない。

深夜、テレビをつけてみたところ、たまたま予備校の番組で、講師が漢文を訓読しているところであった。しばらく見ていると、講師は「兄弟牆鬩」を、「きょうだいかきにせめぐ」と読んだ。私は「おや？」と思ったが、講師はそのまま平然と講義をつづけていった。

駒田先生は、TVで担当の先生が間違っただけを教えているというのです。「兄弟牆闘」とは、「兄弟牆(かき)に闘(せめ)げども外(そと)その務(あなど)りを禦(ふせ)ぐ」という『詩経』にある言葉で、「普段は喧嘩ばかりしている兄弟も外部から侮辱を受けると協力してこれを防ぐ」という意味なのです。「牆」は垣根、「闘ぐ」は争うことから「牆に闘ぐ」は垣根の中(家の中)で争うこと。「務り」は「侮り」と同じく侮辱のことです。さて、どこがおかしいのでしょうか？ 実は、「兄弟」を「きょうだい」と読んだことが間違いなのです。でも、「兄弟」を「きょうだい」と読んで、どこがおかしいのでしょうか？

真意

駒田先生は、「漢字の読み方は、中国の時代によって変わる。中国の南北朝時代の漢字は「呉音」で読み、隋や唐の時代は、「漢音」で読むのが習いなのです。

「兄弟」を「きょうだい」と読むのは、いわゆる **呉音** である。中国の南北朝時代、わが国は南朝に使者を送っていた。呉音というのは、南朝が代々都していた江南の建康(南京)を中心とする地方の音である。わが国の聖徳太子のころ、北朝の隋が南朝の最後の王朝陳を滅ぼして南北を統一する。隋は長安に都した。隋のあとをついだ唐もである。呉音に対する **漢音** というのは、遣隋使・遣唐使が行った長安・洛陽の音なのである。

遣唐留学生たちは帰国して漢音を伝え、**従来の呉音を漢音に変えることを主張した**。たとえば「兄弟」を「きょうだい」ではなく「けいてい」と読むのが漢音である。「文書」を「もんじょ」ではなく「ぶんしょ」と読むのが漢音である。

だが、呉音を漢音に変えるといっても、すでに日本語に同化してしまっている単語(たとえば「びょうぶ＝屏風」、「てんじょう＝天井」など。漢音なら「へいふう」「てんせい」である)を廃することはできない。しかし、**漢文を読むときには、漢語は漢音で読む**(「兄弟」は「きょうだい」ではなく「けいてい」と読み、「文書」は「もんじょ」ではなく「ぶんしょ」と読む)ことが、平安朝以来行われるようになったのである。

その後、**さらに唐音がはいってくる**。唐音とは唐土の音というほどの意味で、唐宋音ともいい、多くは鎌倉・室町時代に渡来した禅僧や商人が持ち込んだ音である。「行脚」「行燈」「暖簾」「蒲団」を「あんぎゃ」「あんどん」「のれん」「ふとん」と読むのは **唐音** である。少なくとも漢文のセンセイには、これくらいのことは心得ておいてもらいたいものである

はい、わかりました。漢字には読み方が。「呉音」と「漢音」と「唐音」の三種類あって、同じ漢字でも、ものによっては三種類に読み分けなければならないのですね。心します。でも、漢文の先生ならずとも大変です。

漢詩を読む

駒田先生のご案内で漢詩の名作をいくつかご紹介します。まず、張継(ちょうけい:720頃-780頃)の名作「楓橋夜泊」(ふうきょうやはく)です。

B 楓橋夜泊

意見 「鳥」(からす)か「鳥」か 「江楓」か「江村」か 「夜半」か「夕方」か？

月落烏啼霜天滿	月落ち烏(からす)啼(な)いて霜天に満つ
江楓漁火對愁眠	江楓(こうふう)漁火(ぎょか)愁眠(しゅうみん)に對す
姑蘇城外寒山寺	姑蘇(こそ)城外寒山寺
夜半鐘聲到客船	夜半の鐘聲(しょうせい)客船にいたる

月は落ち、烏が啼いて 霜の気が空に満ち渡っているようである。
旅愁に眠れぬ眼を窓の外に向けると川岸の楓に漁り火の映えているのが見える。
姑蘇城外の寒山寺の夜半の刻を知らせる鐘の音がこの旅の船にまできこえてくる。

名作であればあるだけ、いろいろな人々がいろいろなことをいいながら間違い探しをして、自説を主張します。最良の引き倒しです。

夜中にカラスは啼かない まず、夜中にカラスが啼くことからしておかしい。「月落烏啼」を「月落ちカラス啼いて」ではなくて、「烏啼山」があるから、「月は烏啼山に落ちて」と読むべきだ。「いや、烏啼山は、その山の名はこの詩からとってあとでつけた名なのでそれは無理だ」。

月がないのに「楓」の色まで分らない それに、「江楓漁火」もおかしい。宋龔明(そうきょうめい)の「中呉紀聞」では、「江楓漁火」ではなく「江村漁火」となっている — というのです。「江楓」は江岸の楓と解してみたけれども、そういわれてみれば確かに疑わしい。月落ちた夜に、舟から対岸の楓の色が見えるはずがないので、「江楓漁火」ではなく「江村が漁火に映えている」がいいというのです。

夜中にお寺は鐘を突かない また、夜半は三更なので、およそ現在の午後11時または午前零時からの2時間をいいます。そんな真夜中にお寺は鐘など突きません。

真意 「烏啼いて」は、そのとき寝ぼけたがカラスが鳴いたのだ。また、「江楓漁火」は、単に、旅愁に眠れぬ眼を船の窓の外に向けると川岸の楓に漁火の映えているのが見えたのだ。それほどカエデは、真っ赤に色づいていきいれだったのさ。詩人の欧陽脩が、「句はすなわち佳なり。(しかれども)其れ如(も)し三更(夜半)ならば、それ鐘を打つの時にあらず」としています。それを受けて、葉夢得(ようぼうとく)は「欧陽文忠公嘗て其の夜半は鐘を打つの時にあらざるを病(へい)とす。蓋し公未だ嘗て呉中に至らざるなり、今呉中の山寺、実に夜半に鐘を打つ」と証言しています。

C 歳月は人を待たず

つづいて、東晋の陶淵明(とうえんめい)の「雑詩」(ざっし)から有名な「歳月不待人」の入った名句を一つ。さすがに優れた句で、感銘を受けます。多くの人の日々の感傷であり、私のいまの嘆きです。特に、駒田さんの解釈が、それを肯定的に救ってくれます。拳々服膺(けんけんふくよう:しっかりと心に銘じて守り行うこと)すべきです。

意見 「歳月は人を待たない」 — ならば、どうすればいいのか？

人生無根蒂	人生は根蒂(こんてい)無く
飄如陌上塵	飄(ひょう)として陌上(はくじょう)の塵の如し
分散逐風轉	分散(ぶんさん)し風を逐(お)いて転ず
此已非常身	此れ已(すで)に常の身に非ず
落地爲兄弟	地に落ちて兄弟(けいてい)と為(な)る
何必骨肉親	何(なん)ぞ必ずしも骨肉の親(しん)のみならん
得歡當作樂	歡を得ては当(まさ)に楽しみを作(な)すべし
斗酒聚比鄰	斗酒もて比隣(ひりん)を聚(あつ)む
盛年不重來	盛年(せいねん)重(かさ)ねては来(き)たらず
一日難再晨	一日(いちじつ)再びは晨(あした)なり難(がた)し
及時當勉勵	時に及(およ)びて当(まさ)に勉勵(べんれい)すべし
歲月不待人	歲月は人を待たず

【注】 第一句の「根蒂」は根と蒂（へた）。草や木は根によって固着し、花や実は蒂によって固着する。第二句の「陌上」は路上。「陌」は田畑の中の路、あるいは街の中の路。第四句の「常身」は道家的な用語で永久不変の存在、あるいは常の實在という意味。この冒頭の四句には陶淵明の老莊的な思考が端的にあらわれている。第八句の「斗酒」は多量の酒という意味もあるが、ここではわずかな量の酒。

【訳】 人のいのちは根や蒂を持たぬはかないものであって、風に舞いあがる路上の塵のように、風の吹くままにちりちりに飛び散っていくのである。つまり、人は生れ落ちたときから既に、常住の地を持つ永久不変の存在ではないのだ。風に吹き飛ばされて地に落ち、たまたま同じところに集まりあったもの同士が兄弟なのであって、なにも血を分けあった間柄のものだけが兄弟なのではない。だから、うれしいことがあったらいっしょに楽しむべきである。わずかな酒があればそれでよい。近所の者と呼ば集めていっしょに楽しくくみかわすべきだ。若い時代は二度とはない。それは一日に朝がもう一度もどってこないのと同じである。その **二度とはない時をとりのがすことなく、悔いのないように大いに楽しく過ごすべきである**。歲月は人を待ってはくれず、忽ちのうちに過ぎ去ってしまうものだから。

「この『時に及びて当に勉勵すべし』を含む最後の四句だけを独立させることによって、**弱年者に対して若いうちにこそ学問に努力せよと教訓する詩、あるいは快楽に走ることを戒める詩** として利用されることが多いが……」と駒田先生は疑問を呈します。

真意

「まさに勉勵すべし」を、駒田先生は「悔いのないように大いに楽しく過ごすべきだ」と解しています。「つまり、人は生れ落ちたときから既に、常住の地を持つ永久不変の存在ではないのだ。風に吹き飛ばされて地に落ち、たまたま同じところに集まりあったもの同士が兄弟なのであって、なにも血を分けあった間柄のものだけが兄弟なのではない。だから、うれしいことがあったらいっしょに楽しむべきである。わずかな酒があればそれでよい、近所の者と呼ば集めていっしょに楽しくくみかわすべきだ。若い時代は二度とはない。それは一日に朝がもう一度もどってこないのと同じである。その **二度とはない時をとりのがすことなく、悔いのないように大いに楽しく過ごすべきである**。歲月は人を待ってはくれず、忽ちのうちに過ぎ去ってしまうものだから」というのです。なるほど、「一生懸命勉強しろ」よりも、この方がお酒も呑めて、楽しくて気分が良いですね。

D 知りぬ多少ぞ

意見 「花が、多少、落ちた」 — 多く散ったのか、少なく散ったのか？

漢詩でよく出てくる「多少」は、多いことを言うのでしょうか、それとも少ないことを言うのでしょうか。駒田先生は、孟浩然の五言絶句『春暁』を題材にしてこの難問に挑戦します。そしてこの詩を、次のように、あいまいに日本語訳をしました。

春眠不覚暁	春眠暁を覚えず、
处处聞啼鳥	处处(しょしょ)啼鳥(ていちょう)を聞く、
夜来風雨声	夜来(やらい)風雨の声、
花落知多少	花落つること多少なるを知る

これだけでは、多く散ったのか、少なく散ったのか分からないままなので、気が引けた先生は、「この詩は詠嘆の歌である」として、次のように書き添えて「多く散った説」を主張するのです。

「春眠暁を覚えず」という言葉は、一般には春のうららかさ、のどかさをあらわす言葉として使われているが、原詩では、のどかな眠りのむこう側に、[不遇な生涯をおくった作者の孟浩然の] 悔いの気持もふくまれているのである。そういえば昨夜はずっと雨風の音がしていたが、さぞかし花がたくさん散ってしまったことだろう、という詠嘆のなかにそれがあらわれている。「花落ること知んぬ多少ぞ」という気取った口調 [の訳し方] では、それ [作者の人生への詠嘆・嘆き] が感じ取れないのではなかろうか。

それで、どうしても、「花が沢山散ってしまった。残念だ」と訳さなければならないのです。

真意: その1 添え字説 ある学者は、他の詩人・杜牧の「江南春」の「多少楼台烟雨中」を提示して、次のように主張します — 「『多少』の『少』は添え字であって、意味を持たないのである。『多少の』が『多くの』という意味であることは、この詩の場合、明らかであろう。勿論、『多少』には『どれほど』という意味もある。だが『どれほど』というのは『どれほど多くの』ということであって、『どれほど少なくの』ということではない」。

駒田信二 — 「杜牧の『江南春』の結句を「多少の楼台烟雨の中」と読むのと同じく、私は『春暁』の結句を『花落ること多少なるを知る』と読んだのだが、いっそのこと『花落ること多少を知る』と読んだ方がよいかもしれないと思っている」。

真意: その2 「知多少」は「不知多少」説 またある学者は — 「『知多少』は、多少なるかを知らんや、従って実は『不知多少』、多少なるかを知らずの意である。ある解釈には『多少』とは多きことといい、たくさん散りしいたであろうと説いているが、そうではない」と、「多く散った説」を否定しています。

真意: その3 「知」の字+疑問詞=反語説 またある学者は、「知の字とその次に疑問

詞を伴うときは反語に読む」として、「多いのか少ないのか分からないときにいうのだ」としています — 「『知』の字、その下に疑問詞をともなう時は、ほとんどこれを反語によみ、結局は『不知』の意味になること、詩にはしばしば見られる語法である。たとえば、李頎の詩に「憶君淚落東流水、歲歲花開知為誰」（君を憶うて涙は落つ東流の水、歳歳花開くも誰が為なるかを知らんや）、また杜甫の詩に「明年此会知誰健」（明年此の会い誰か健なるを知らんや）などとうたわれるのがそれであり、**「いったい……かしら」という気持ちをあらわす**。多少は、どれほどという意の疑問詞。それで、この詩を詠んだ本人は、「いったい、花は沢山散ったのか、少ししか散らなかったか分からない」と寝ぼけていたことを正直にいつているのです。

結論

それで、駒田先生の結論は、少し言い訳がましいのですが — 「右のように、いま私の手もとにある注釈書のすべては『多少』を疑問詞としている。ここにはもう書く余白をなくしてしまっただが、私は小著の『春眠暁を覚えず』の項に、孟浩然が不遇な生涯を送った人であったことを記した上で、この詩は必ずしも『風流閑美』な詩ではなく、作者の不遇が反映されていると解したのである。『さぞかしたくさん花が散ってしまったことだろう』（花落ること多少なるを知る）という読み方はそこから出た。しかし、固執するわけではない。ただ、私はそう読みたいのである」。

では、そう読んでいただいております。

疑問

さて、漢詩を読んでいて、いつも不思議に思うのは、そのそれぞれの作品において、それぞれ色々な解釈がなされ、其れが許されていることです。すなわち、中国語は、長い歴史を持つにもかかわらず、言葉使いに決まった法則がなく、解釈に決まりがないということです。先に、駒田先生までも、「いま私の手もとにある注釈書のすべては『多少』を疑問詞としている」と仰っているように、日・中の注釈書がこぞ一つ一つの答を出しているにもかかわらず、当の駒田先生さえも自説に拘泥(こだわ)り、新説を主張して止みません。また、それが広く許されていることも不思議です。先に見たように、詩人は「多少」という言葉を乱用して詩を新作しますが、その意味までも表示しません。解釈は、読む人それぞれに任せておくのです。でも、詩人の賈島(かとう)と韓愈(かんゆ)が論じ合った「推敲」という言葉の成り立ちの物語から分かるように、作者は、一字・一句を決めるにも心血を注いで「推敲」しているのです。どんな作者も、自作にいいかげんな解釈を許すわけはありません。中国には、指針とする文法書とか辞書・字引といった類いの「定本」や「教科書」や「解説書」や「研究書」はないのでしょうか。「多少はある」ですって？

むろん、駒田信二さんご本人をはじめ、漢文学の泰斗の吉川幸次郎先生や目加田誠・塩谷温・鎌田正・高木正一などの諸先生方が、この「花落知多少」についてそれぞれご意見を述べておいでです。でも、学界で統一された判断はなされていず、それを規範ともされていません。解釈を決める決定的な法則、すなわち、「文法」がないのです。因みに、日本語の国文学者小西甚一先生の『基本古語辞典』には「多少」も「多」も「少」も載っていません。芭蕉の「古池や」の俳句で池に飛び込んだ蛙は一匹であることは、私の論文で証明されました。でも、蛙の数は増えつづけています。日本の大相撲に高安(たかやす)という関取がいます。良いところまで行くのですがなかなか優勝できません。ファンも多く、人気は高いのです。漢詩の世の中、百花繚乱(ひゃっかりょうらん)・百鬼夜行・五十歩百歩です。その自由さが、「文学」というものなのではないでしょうか。

【2025/09/13 都築正道】